

雪が飛んでいた。

降っているのでも吹きつけられているのでもなく、激しい風にあおられて、空中をまよこに飛んでいるのだ。

鉛色をした空と海の境界は、白い走査線となつて視界をさえぎる雪のせいで、さらにはつきりとしなかった。その世界で唯一、はっとするほど鮮やかな色彩をもつのは、海岸の岩場に叩きつける波だった。濃く、深い青が、とがった岩礁にのしかかり、断末魔のような気泡をうかびあがらせながら岩場を這いあがるとき、一瞬にして純白に色をかえる。

その光景は、海が傷つき、白い血を流してのたうちまわっているかのようだ。しかし実際にはえぐられ、削りとられているのは、海ではなく、鋭角にそびえる岩のかたまりだった。

北の海を見おろす崖の中腹にその家があった。建てられてから何十年という歳月が流れ、塩を含む風が、まるで紙ヤスリのように、屋根やつきでた庇、壁のあちこちを痛めつけていた。

それでも建物は重厚で、陰うつな存在感を漂わせていた。もしこれが冬ではなく、明るい陽ざしのもと、高気圧のやさしい腕に抱かれた海を見おろしていたなら、と私は思った。きつと、古さに暖かみを感じただろう。なめらかさに安らぎを感じただろう。

素足で走りまわる子供たち。母親を呼ぶ声。夕餉の仕度(ゆうげ)にたちのぼる煙。その家は家族にこそふさわしい存在に見えただろう。そしてもしそうであれば、季節が夏であれば、彼女はそこにはいなかっただろう。

ま新しい四WDが、鉄門から家につながる、コンクリートで固められた坂の頂上に止まっていた。地元のナンバープレートをつけている。黒く塗られた鉄門は錆びつき、浮き上がった。ペンキが触れればぼろぼろと落ちてしまいうように見えた。坂道を固めたコンクリートにはひび割れが走り、そのところどころから、褐色の雑草が立ちあがっている。

鉄門に鍵はかかっていなかった。

私は車を降りてからしばらく、海と、海を見おろすその家を眺めていたのだった。だがふと気持をそらすと、この旅にでるまでの数日間、くりかえし見たビデオのあるシーンに心がいった。

慈しむような笑顔。心配そうにのぞきこむ目、一瞬後、また笑顔。

スパンコールをちりばめ、体の線を強調する衣装をつけ、何本ものスポットライトの光を浴び、十人をこすバックバンドをしたがえ、一人人の視線にとらえられるステージの上にながら、彼女の目はあるひとりの人物の姿しかとらえていなかった。

顔をくしゃくしゃにし、あやすように首をふつてみせる。絶え間なく、彼女は笑顔をその

人間に向けつづけている。

——サムクナイ？

ビデオの画面は、声にこそならないが、そう動く彼女の口もとをはつきりとらえている。しかし、決して彼女がそう問いかける相手をうつしだすことはない。

寒そうに見えるのは、ステージに立つ彼女の方だ。白く上がった肩がむきだしになり、アンバランスな豊かさも胸のふくらみも、その半ばまでを衣装から露出させている。

ウエストは、そこに生きていくのに必要な臓器がすべておさまっているとは考えられないほど細く、形のよいヒップラインからのびるのは、黒く光沢のあるストッキングに包まれた長く美しく、華奢な脚だ。

曲にあわせて体を動かし、十六歳のときにヒットさせた歌のイントロを口ずさみながらも、彼女はまた、同じ人物を見ている。

——ダイジョウブ？

再び彼女の口が動く。歌声がマイクに送りこまれる。

歌いながらもなおかつ、彼女は微笑みかける。その笑みは母親のようで、姉のようで、しかもたとえようなない悲しみをにじませている。

七年前、彼女がその歌でデビューしたとき、そして瞬くまにスターにのぼりつめたとき、マスコミは彼女に、ある神話の匂いを嗅ぎつけた。

それは不幸の神話だった。複雑な家庭、恵まれなかった家族愛と、孤独な少女時代。言葉

にすればひどく陳腐でありながら、目に強い光をたたえた十六歳の少女がまとったとき、多くの人々の心をつかんだ。

少年も含め、男たちは、ときおり見せるひどく大人びた表情にセクシーな匂いを感じた。どこか猥雑で、うらぶれた娼婦のようなけだるさを彼女は身につけていた。何ひとつ、恐しいものなどない。人生における、最悪の時間は、もう通りすぎてしまったのよ——彼女の目はそういつてのけているように見えた。

何が欲しいの。欲しいものがあるなら、もっていけばいいでしょう。

彼女は今にもそう告げそうだった。彼女の吐く息は、心を溶かす甘さをもちながら、ひどく、どうしようもなく、重かった。

そんな彼女に、男たちをこすボルテージで熱狂したのが、十代の半ばから終わりにかけての年齢に達した少女たちだった。特に、家族や学校を見棄てた、あるいは見棄てられた、少女たちだった。

彼女のまとう不幸の神話は、そのまま、自分が孤独だと感じるつっぱり少女たちの伝説となった。伝説は、伝説として尾鰭がつき、増殖していく。

彼女は十四歳で、女暴走族のリーダーをつとめていたことになっていた。そして最初の

“男”は、バイクで事故をおこし、死んだ、と。

その“男”が散ったとされた、神奈川県のある有料道路の“コーナー”は、伝説を見とどけようという若者たちで、毎土曜の晩、溢れたものだった。花や線香が絶えることなく供え

られ、中には、雨の晩、メルセデスの後部席から降りたつて濡れるのもいとわず手をあわせ  
ていた彼女の姿を見たとき、まことしやかにいう者まで現れた。

その頃の彼女は、笑わない少女といわれていた。いつも張りつめたように険しい顔をして  
いるか、まったくの無表情だった。

不幸の神話には笑顔が似あわないと考えた者がいたのか。それとも、彼女自身が実際に笑  
わなかったのか。

いずれにせよ、テレビ画面に顔をさらしつづけることを義務づけられたアイドルが常に無  
表情でいるのは不可能だった。何年かが過ぎ、彼女も笑顔を浮かべるようになった。

そこで発見されたのは、彼女の笑顔には悲しみがある、ということだった。どれほど笑い  
転げてみせようと、その笑みの奥には刹那的せつななあきらめがあった。口もとを隠し、微笑むと  
き、その目には深い痛みがあった。

それを私自身が知ったのが、プロダクションから渡されたサンプル版のライブビデオだっ  
た。そのビデオは、失踪の一ヶ月前に開かれた最後の野外公演のもようを収録している。発  
売は二週間後、すでに予約が十万本以上、入っていた。

公演の彼女は、楽しそうにふるまい、ときにはカメラに向けおどけてみせた。決して悲し  
みに沈んだ表情を、その横顔を、いや、そうしたうしろ姿すら、撮らせることはなかった。

しかし、ステージの上で、彼女が特定の、あるひとりの人物に見せた笑顔にだけは、本当  
の彼女の気持ちがあらわれている、と私は感じた。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信するこ  
と、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁  
じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をし  
ますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。